

メッセージアウトライン ローマ11：1～12「残された者」

[1] 「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です」神は神の選びの民であるイスラエル民族を退けてしまわれたのかという疑問に対して、パウロは絶対にそんなことはないと強く否定する。その理由の一つは、今このように語っているパウロ自身がイスラエル民族出身であるということであり、それゆえ神はイスラエル民族全部を捨てられたのではないというのである。

[2-4]神は、あらかじめ選び、知っておられる民族を捨てられるようなことは決してない。パウロは3節でI列王記19:10を引用して説明する。これは、あの有名なカルメル山でのバアルの預言者たちとの対決で、彼らを滅ぼした後、女王イゼベルの殺害予告を受けてホレブの山に逃れた時にエリヤが神に訴えた場面である。4節はI列王記19:18の引用であり、神はエリヤにイゼベルによってイスラエルに持ち込まれたバアル礼拝に従わず、真の神に忠実な男子七千人が残してあると答えられたのである。

[5-6] 「それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいます。…」エリヤの時代の出来事はそのままパウロの時代においてもあてはまり、現代においてもあてはまる。多くのユダヤ人は不信仰でキリストの福音に反対しているように見えるが、神の選びによって救われるために残された者がいるというのである。6節では、救いは行いではなく、恵みによるということが強調されている。ユダヤ人だけに限らず、圧倒的な不信仰の時代にあっても常に神の自由な選びと恵みによって残された人々がいるということは何と幸いなことだろうか。

[7-8]7節はこれまで述べてきたことの結論と言える箇所である。神の義、救いを行いによって追い求めていたイスラエルはそれを獲得できなかった。選ばれた者は獲得したが、他の者はかたくなにされた。これは不信仰に対する神のさばきである。8節でパウロはイザヤ6:9~10、申命記29:4から自由に引用してそのことを描写する。

[9-10]ここは詩篇69:22~23からの引用であり、ダビデが敵対する者たちについて語っている箇所。パウロはここでイスラエルの多くの者たちは神の選びの民であることを誇り、神の律法を与えられていることを、その食卓で自慢し、誇ることによって、かえってそれがつまずきとなり、神のさばきとなっていると言うのである。「その目はくらんで見えなくなり」とは霊的に盲目となって神の真理、福音に気がつかない状態。「その背はいつまでもかがんでおれ」とは、いつまでも律法の重荷を負い続けるがよいとの意味。

[11-12]ここからは今までの論議を受けて新しい展開となる。イスラエルがキリストの福音につまずいたのは彼らが倒れ滅びるためか。絶対にそんなことはないパウロは言う。それはイスラエルの不信仰によって救いの福音が異邦人に及ぶためであり、それによって彼らにねたみを起こさせる、つまり発奮させることにあった。イスラエルの不信仰によって救いが異邦人に及ぶことになった。ならばイスラエルに対する神の計画が完成する時には、どれほどすばらしいことがもたらされるだろう。やがて異邦人の時が満ちる時にはイスラエルも救われる。→ローマ11:25~26